

精神疾患を有する親をもつ成人の ライフストーリー分析

—過去のケア経験の受け止め方と現在の生き方への影響に着目して—

田邊美里（小峰ゼミ）

HS22-1099K

論文の目次

1. 問題の所在
2. 研究方法
3. 分析
4. 考察

論文の要旨

1 問題の所在

家族をケアする経験は、家族内の私的
問題として扱われやすく、子ども世代が
親のケアを担う場合でも「当たり前」「仕
方がないこと」として当然視されやす
い。加えて、蔭山ほか（2021）では親が
精神疾患を有する場合、ケア役割を担う
人は情緒的サポートを行うことが多いと
指摘されている。こうした親をもつ子ど
もは意図的なケアに限らず日常の中での
声掛けや相談を聞くことが結果的にケア
に当たることもあるため、ケアラーとし
ての自覚を持ちにくい。また、河西
（2020）では精神疾患に対する社会的ス
ティグマの存在から周囲へ相談しづら
く、孤立しやすいという問題が指摘され
ている。このようなケア経験は、幼少期

の一時的な出来事に留まらず、成長後の
対人関係のあり方や価値観の形成、さら
には進学・就労・恋愛等の人生選択にも
影響を及ぼしている可能性がある。本研
究は、精神疾患をもつ親をケアしてきた
当事者の語りをもとに、その経験が成人
期以降も含め価値観や行動選択にどのよ
うに影響してきたのかを明らかにする。
これまで可視化されにくかった経験や困
難を提示することで、彼らへの社会的理
解を促すことを目指す。

2 研究方法

精神疾患を有する親をもつ子どもの会
団体 A の当事者会に参加した経験のある 6
名（A～F さん）に半構造化インタビュー
を実施し、逐語録を作成した。分析に
は、複線径路・等至性モデル（TEM）と発
生の三層モデル（TLMG）を用いた。

3 分析

TEM における等至点とは、多様な経験の
径路が収束する地点を指す。本研究では

協力者がこれまでの経験を通してたどりついた現在の生き方や考え方を示す。等至点に至るまでのプロセスでは、親の状態や家庭環境だけでなく、それに対して周囲がどのように関わったか、あるいは関わらなかったかが重要な意味をもっていた。協力者の語りからは近隣住民、学校、医療機関、警察などの第三者から、「子どもが親を支えるのは当然」といった扱いや精神疾患への差別を受けるケースも見られた。これらは等至点から遠ざけるように働く社会的方向づけ（SD）として作用し、当事者が抱える困難や負担を見えづらくする原因になっていた。人生径路の中には、等至点に近づけるように働く社会的ガイド（SG）も確認された。なかでも大きな転機としては、協力者が自らの経験を言語化できるようになったこと、当事者会や信頼できる他者と出会ったことによって「それまで語ってこなかった経験を語る場」を得たことがある。Eさんは統合失調症の母親をもち周囲の精神疾患への差別・偏見を目の当たりにしてきたことで、強い劣等感や孤独感を抱えながら生きていた。しかし、団体Aと出会い「自分も尊敬する団体Aのスタッフの一員なのだ」と自己認識を改め自尊心が回復する方向に向かった。現在Fさんは社会福祉協議会等で体験発表することで差別・偏見の解消に努めており、その他の協力者の人生径路の中でも仕事への向き合い方の変化などが見られた。

4 考察

人生径路の中で行ってきた選択は、置かれた環境の変化によるものにとどまらない。人間関係、直面してきた差別や偏見に影響されて形成された価値観は新し

い人や場との出会いによって変容し、協力者の価値観・行動に変化をもたらした。Aさんの父親は三者面談で担任に家庭の事情を打ち明けたことがある。このように当事者や家族がSOSを発した事例がある一方で、ケア役割を担っている状況を他者に打ち明けることに強い抵抗感を抱いていた事例（Bさん、Cさん、Eさん）もある。当事者が様々な社会的・心理的・環境的要因から容易に援助要請を行えない状況にあることを、支援者だけでなく、社会で生きる一人ひとりが認識する必要がある。「親の面倒を子どもが見るのは当たり前」という価値観だけでなく、家事や親の世話をする子どもを周囲が称賛する環境が、子どもがSOSを出しづらい状況を作っている。そのうえで支援にアクセスしやすい社会を構築するためには、個々人や支援者が「依存・甘え」を弱さだと捉えるのではなく、許諾する雰囲気を形成することが重要である。さらに、当事者が出したSOSを受けて今後求められるのは、個々の支援者の善意や力量に対応を委ねるのではなく、地域共生社会の実現を目指し多くの人が差別・偏見をすることなく共生することである。

主要参考文献

蔭山正子・横山恵子・坂本拓・小林鮎奈・平間安喜子, 2021, 「精神疾患のある親をもつ子どもの体験と学校での相談状況：成人後の実態調査」『日本公衆衛生雑誌』第68巻 第2号 131- 143頁
河西優, 2020, 「精神障害の親をもつ「ヤングケアラー」の語りにもみる社会的排除：「ケアする存在」と「ケアされる存在」のはざままで」『関西大学社会学部紀要』第135号 129- 208頁